

## 目 次

法人化後の附属図書館経営について (伊藤義人) .....	1
英国の図書館訪問記 (大塩和彦・真野博和) .....	4
アメリカ東海岸の大学図書館訪問報告 (粟野容子) .....	6
平成15年度特別図書(人文・社会系)一覧.....	8

No.151

2004. 5. 15

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

## 法人化後の附属図書館経営について - 競争と連携 -

伊 藤 義 人

### 1. 法人化後の大学図書館

大学の役割が、教育、研究、社会貢献であるということは、法人化後も変化はありません。名古屋大学附属図書館も、この役割の名古屋大学を支える大学図書館を目指すことは言うまでもありません。自主性を持った個性ある大学として、「新しい教育研究領域、新しい教育研究手法の確立」などを支える図書館を目指すこととなります。法人化後は、大学は従来の部局単位ではなく、今後は大学全体として説明責任を社会に示す必要があり、大学図書館は「大学の顔」という本来の役割を果たすことが求められています。

大学改革の大きな目標の1つは、学生を中心に据えるということです。法人化後の大学図書館の方向性は、当然、大学改革の方向と一致している必要があります。そのため、まず大学図書館は、快適な学習空間、学習基盤をさらに整備して、学生の学内滞在時間の長期化を図る必要があります。このための資源確保は、大学が責任を持って行う必要があります。

社会への説明責任としての情報発信について、大学は従来、学部、研究科、センター、研究所等がバラバラに情報を外に発信していましたが、これでは大学が持つ情報が外部から非常に分かりにくいです。そこで、図書館が「大学の情報発信の中心となる」ことも必要でしょう。

文部科学省のデジタル研究情報基盤ワーキング・グループが平成14年3月に出した報告書<sup>1)</sup>では、各大学が機関共同サーバーを作り、国立情報学研究所と連携して、種々のコラボレーション環境を提供するという構想で図書館機能の強化を既に打ち出しています。名古屋大学附属図書館では、情報連携基盤センターとも連携して、学術コラボレーションシステムやその発展型である学術ナレッジ・ファクトリー構想を立ち上げ、一部試行を開始しています。今後、この構想を一層進める必要があります。

大学図書館も、大学の役割と同じく教育と研究だけでなく社会貢献を目指す必要があります。大学構成員のためだけの図書館ではなく、市民などの学外者にもオープンにすることが求められています。名古屋大学の中央図書館は、早くから休日開館を実施しており、本の貸し出しを含む市民への図書館開放も既に行っていますが、今後は、さらに大学図書館資料を必要とする学外者へのサービスの提供が求められます。また、来館を待ってサービスを行うだけの姿勢ではなく、積極的に図書館を高度利用できるような工夫も必要です。貴重な図書館資料を積極的に開示する展示会や講演会の重要性もますます高まると思います。

大学図書館も“経営する”、つまり、業務の改革や責任体制の明確化を行う必要があります。

す。これは、単に独自の収入源を求めるというようなものだけではなく、もっと根本的な改革を求められています。大学自体、IT武装化を進める必要があり、図書館は大学の情報戦略の中心にあるべきだろうと思います。

今後、大学図書館の間では競争と連携をすることになります。連携は、大学の学術基盤整備と情報発信の核となるという点に関して、これまで以上に行い、競争は、個性ある大学を支える図書館を設計することによって行うこととなります。大学図書館は、両方の視点でその存置理由を常に問われます。時代に合致した自律的なたゆまぬ変革を行い、外部評価を受けて説明責任を果たさなければなりません。

## 2. 競争と連携による図書館経営

競争というと、すぐにゼロサムの奪い合いというようなイメージを受けますが、ここでいう競争は、そのようなものを意味しません。質の向上を目指すことを意味します。先進的な試みを自己責任で行い、大学の新しい教育研究分野・教育研究手法や社会貢献を支援するという意味です。護送船団方式で、合意を取って、一斉に同じ事をするということの対極に位置する考え方です。

法人化に対応するためには、これまで以上に連携が必要であり、特に地域連携と国際連携が重要になると思います。

図書館の連携については、古くから認識されています。しかし、現状では、設置形態が類似の館間での連携は多少ありますが、設置形態の異なる館間では、ほとんどありません。もはや財政的にとて1館ではやっていけません。例えば、一般書を収集している公共図書館と教育研究書を収集している大学図書館の連携は、補完できる関係にあります。これまで、多くの国立大学は積極的ではありませんでした。「インターネット」や「デジタル化」という道具が整備されつつあり、また「社会の要請」という風も吹いていますので、設置形態を越えた実質的な連携をする環境が整ってきたと言えます。

その連携活動を始める例として「デジタル・レファレンス」が挙げられるのではないかと思います。先行事例の「デジタル・レファレンス」として、米国のQuestionPoint<sup>2)</sup>があります。これは、OCLCやLCなど100以上の図書館による

共同プロジェクトで、信頼性、持続性ある共同レファレンス・サービスを提供しようとするものです。インターネット上のQuestionPointによって、24時間いつでもプロのレファレンス・ライブラリアンがサービスを提供するというVirtual Reference Serviceです。

公共図書館との連携と棲み分けも必要となります。大学図書館と公共図書館は、互いの代わりはできませんが、市民や大学構成員のニーズが非常に多様化しているため、双方が協力しないと生涯教育やNPO支援等に対応できません。また、公共図書館を含む地域連携に関しては、地域の中核拠点として大学図書館はあるべきでしょう。大学図書館だけの連携組織ではなく、実際の共同事業を行える館種を越えた連携組織が必要でしょう。

地域の連携を進めるために、大学図書館と公共図書館の連携の枠組みとして、「東海地区図書館協議会」の設立を目指して、既に名古屋大学附属図書館のリーダーシップにより話し合いが進んでおり、今年中には新しい連携の枠組みができるものと思います。

## 3. 法人化後のハイブリッド図書館整備

名古屋大学附属図書館は、従来型図書館機能と電子図書館機能を有機的に融合したハイブリッド図書館を目指しています。法人化後、各国立大学職員は、法人のために働く必要があり、他の国立大学法人のためには、何もできず連携ができないと考えている人もいます。少なくとも、法人に害を与えるような連携はできませんが、電子図書館機能の整備のための連携の代表である電子ジャーナルコンソーシアム<sup>3) -6)</sup>などは、当然、国立大学法人の利益にかないますので、これまで以上の利益が得られるような活動を行っていく必要があります。

電子図書館機能整備の問題点は大きく分けて1)著作権問題、2)費用、3)新しい資質を持った人材の育成、の3点ですが、いずれも単独で解決できるものではありません。

電子ジャーナルは導入に膨大な費用を要しますのでコンソーシアムが必要です。電子ジャーナルの欠点であるアーカイブスについても、日本では国立情報学研究所が既にアーカイブスのサーバーを立ち上げましたが、今後も強化する必要があります。市民が大学に来て利用する場

合 (Walk-in User) も、電子ジャーナルは原則利用可能としていますので、社会貢献の道具にもなります。名古屋大学の中央図書館では、学外の来館者に対する電子ジャーナルの印刷サービスを、この4月から開始しています。

私立大学でも、電子ジャーナルのコンソーシアムが立ち上がる予定です。また、国公立大学図書館協力委員会でJCOLC (Japan Coalition of Library Consortia) を作りました。現在はまだ単なる情報の共有ですが、少しずつ公私立大学にもコンソーシアムを広げようと努力されると思います。

電子ブック (e-Book、Online Book) については、世界で10億ドル市場になるとも言われています。それに対して日本は相当遅れをとっています。今後、この電子ブックに関しては大学図書館が役割を果たせるのではないかと考えています。例えば、教科書であれば、著者、利用者、サービスする図書館、いずれも学内にあります。また、同じ冊子版は大学出版会から出版すれば、費用の問題はないだろうと思います。さらに、WebCTなどのe-Learningツールにも対応できるようにすると良いと思います。外国では既にe-Learningで電子化された講義を無料で公開している大学もあります。

名古屋大学附属図書館研究開発室は、情報連携基盤センターとも連携しながら、電子ブックの普及と高度利用について検討を行っています。

法人化に関連して、図書館及び職員に求められるものは、情報技術を活用した学内、地域、全国、国際的連携です。それから、文化情報資源の維持発展を忘れてはなりません。情報技術を活用した新しい知恵も必要です。研究開発機能、企画・立案、経営力といった、新しい資質が求められています。

#### 4. おわりに

これまで、名古屋大学附属図書館は、法人化後を見据えた準備を、種々してきましたが、この4月に法人化が実施されて、いよいよその成果が試されることとなります。法人化を成功に導くためには、経営や運営に責任をもつ役員会などの執行部の的確な判断と見通しとともに、教育研究評議会や商議員会などの審議組織がうまく機能して、職員の創意工夫と協力がうまく

融合することが必要です。その意味では、法人化は、大学構成員の個々人が自主性と意欲を持って活動することが求められています。

図書館学で有名なS.R.ランガタンの「図書館学の5原則」の1つに「図書館は成長する有機体である」がありますが、今こそこれを名古屋大学で実践して、歴史的転換点とパラダイム転換を乗り越えていかなければなりません。大学や図書館の置かれている危機的状況は変革のチャンスでもあり、図書館の自己改革と再設計を行うため、図書館の迅速な意思決定システムを創り、地域及び全国レベルで大学図書館が連携協力することによって、大学図書館がその本来の役割を果たせるように、図書館職員一同努力していくつもりです。

#### 参考文献

- 1) 科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会 情報科学技術委員会デジタル研究情報基盤ワーキング・グループ：“学術情報の流通基盤の充実について”平成14年3月，URL [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm) .
- 2) URL <http://www.questionpoint.org/>
- 3) 伊藤義人：国立大学図書館協議会のコンソーシアム構想について、『情報の科学と技術』，Vol.52，No.5，2002年5月，pp.262-265 .
- 4) 伊藤義人：電子ジャーナルへの対応，『大学図書館協力ニュース』，Vol.22，No.6，2002年3月，pp.9-11 .
- 5) 伊藤義人：大学改革と大学図書館，『平成14年度大学図書館職員講習会テキスト』，大阪大学附属図書館編，文部科学省，2002年11月，pp.16-17 .
- 6) 伊藤義人：大学図書館経営における電子図書館機能の基盤整備について，『国立国会図書館月報』，No.504，2003年3月，p.3 .
- 7) 伊藤義人：法人化後を見据えた図書館経営について，『大学図書館研究』，No.70，2004年3月，pp.13-17.

注：この原稿は、文献7) で書いた内容を含んでいます。詳しくは文献7) を参照してください。

(いとう・よしと 附属図書館長)

海外の図書館訪問記 その2

## 英国の図書館訪問記

大塩和彦・真野博和

2003年冬に英国の5つの図書館を訪問する機会を得ました。以下、見聞の一端を報告します。

- + 期間：2003.11.16～11.23
- + 目的：英国における日本語資料・古典籍の現状、及び海外の図書館に関する調査

### はじめに：訪英に至るまで

今回の訪問は、目的・訪問先の設定、相手機関とのコンタクト等を出張者自身が行いました。訪問目的を設定するにあたっては、今回の訪問実現が平成14年度展示会「古書は語る」に深く拠っている点を踏まえました。出張者両名は国内機関へのお出張すらほとんどなく不安を抱きつつの船出でしたが、多くの方からのご助言をいただきつつ、拙い英語をもフルに発揮して、何とか訪問までこぎつけることができました。

### 1 . The British Library ( London )

蔵書1,200万冊、スタッフ総数2,400名を数える英国図書館は世界を代表するナショナルライブラリーです。英国及びアイルランドで出版されるすべての印刷物の無償納本を受けます。

建物は非対称で、これは隣接するセントパンクラス駅が隠れないよう景観に配慮したためだそうです。入館後、目の前に現れるのは、ジョージ 世の旧蔵書Kings Libraryです。蔵書約6万冊を一箇所に集中管理するという遺言に従い、保管されています。

日本関係資料は人文系を中心に8万冊以上を所蔵しています。1969年以降のものが遡及入力されており、Union Catalogue (英国日本語出版物総合目録) で検索できます(注1)。それ以前のはカード、または冊子目録によります。古書コレクションは大英博物館の設立者であるスローンがケンペルの蔵書を買入れたものを核に構成されています。19世紀半ばに大英博物館へ収められた日本語資料は和綴りから洋綴りへと綴り直されており、痛みが激しいようでした。私たちは『源氏物語絵詞』(17世紀後半、土佐

派)と『弁慶物語』(岸信介1960年寄贈との書き入れ)を閲覧しました。なお、日本部門の利用者層としては、日本からの研究者 日本語学習者 その他一般 の順に多いとのことです。

### 2 . The University Library (University of Cambridge)

大学内の学部、研究所、カレッジなどに約100の図書館(室)があり、私たちは、その中心となっているUniversity Libraryを訪問しました(写真1)。資料の配置状況としては、University Libraryに研究資料が、その他の図書館(室)に教育資料が置かれ、研究室への配置はないとのことでした。なお、全学の蔵書は600～700万冊に及びます(内、約半数程度が貸出可能)。

日本関係資料の蔵書は約9万冊で、年間受入冊数は図書約1,000～1,500、雑誌カレントタイトルが約350で、これらは青井パビリオンと東洋学部の図書館に配置されています。青井パビリオンは約4億5千万円の寄付によりUniversity Library南側ウイングに増築された建物で、日本語、中国語、韓国語の各研究資料を所蔵しています。一方、東洋学部の図書館の蔵書は英語資料が中心とのことでした。



写真1 The University Library (Cambridge)

青井パビリオンは地上2階・地下1階の建物で、2階の入口を抜けると手前がサービススペース、奥が事務室、その他レクチャールームなどもありました。1階と地下1階には手動式の集密書庫があります。その一部は閉架で、Aston Collectionを中心とした和装本、軸物と『明治期刊行図書マイクロ版集成』を所蔵しています。古書はW. G. AstonやE. Satowが集めた資料が蔵書の核となっており、請求には冊子体目録を使用します。また、配架状況として特徴的であったのは、「請求記号 = 登録番号」としている点と、言語 地域の順で配置されている点でした。私たちは英国に初めて伝わったといわれる日本語資料『吾妻鏡』を閲覧しました。

### 3 . Bodleian Japanese Library (University of Oxford)

オックスフォード大学には、カレッジ、学科、学部図書館等を含むボドリアン図書館グループが存在しますが、Bodleian Japanese Libraryはこのグループを構成する1館です。全蔵書約10万冊の内、約8万冊が日本語資料で、写本・和装刊本など古書を約1,000冊所蔵しています。日本研究者向けのものを中心に、特に地方史関係が充実しています。古書は、温度・湿度管理の下、貴重書室に保管されていました。目録は未整備とのことですが、館長の頭の中ではしっかりと把握されているようです。

この他、ボドリアン図書館グループの中心にはBodleian Old Library (1602年創立)(写真2)、Bodleian New Library (1946年創立)があり、私たちは前者のツアーに参加しました。ボドリア



写真2 Bodleian Old Library (Oxford)

ン図書館は貸出しを行わないというポリシーを維持していますが、この伝統には、この図書館の納本図書館としての役割とともに、図書館には常に資料が備わっているべきだというひとつの思想が垣間見られます。なお、2000年にはOxford University Library Service (OULIS)が形成され、ボドリアン図書館を中心に全学的な組織統合を図る動きもあるようです。

### 4 . Main Library (University of Sheffield)

シェフィールド大学は、英国における日本研究の拠点のひとつです。図書館の蔵書約130万冊の内、日本語資料は2万5千冊、日本語逐次刊行物は200タイトルあり(1/3が開架)、古書を含む図書の全てと、雑誌の1/3がNACSIS-CATへ登録済みです。

Main Libraryでは、1850年以前の古い資料がSpecial Collectionsとして保管されており、日本語資料の古書はここに収められています。その中で『北斎漫画』『東海道中膝栗毛』を閲覧しました。刊本のみを所蔵で写本はないとのこと。また特別資料として、占領期のマイクロ資料、1930年代のファシズム関係の資料を所蔵しています。

館内で目に付いたものとして、カウンターにレジスターがあり、延滞のペナルティとして罰金を払う学生がいたこと、PCコーナーに約100台のパソコンが設置されているものの、不足気味で利用待ちの学生の列ができていたことなどがありました。コピーセンターでは、PCコーナーからLAN経由の出力や、資料の複写が行われていました。ここではIDカード(学生証)を利用して支払いをしていました。

### 5 . Main Library (The University of Edinburgh)

1580年創立のエジンバラ大学図書館(EUL)は17の図書館からなり、300万冊の蔵書、約4,000タイトルの電子ジャーナルを有するスコットランド有数の大学図書館です。各学部が3つのCollegeへ集約された現在、図書館サイドでも資料の集中化が図られつつあるようです。

Main LibraryはEULの中心で、人文・社会系資料のセンターでもあります。現在の建物は8つのフロアのうち利用者向けスペースが6フロアとなっており、館内にはLibrary Shopやカフェ

エなどがありました。なお、大学のコンピュータ部門 (ECS) と同居しています。

東アジア部門では、言語が東アジアオリジナルの資料を1967年以降収集しています。その数約40,000点に上りますが、中国語が大半で日本語資料は約1,000点程度に留まる状態です。なお、政府基金を共有しているスコットランドの他大学図書館との間でリソースシェアリングが行われていますが、エジンバラ グラスゴー間などは近距離のため、利用 / 管理両面で有効に機能しているとのことでした。

**おわりに：出張を終えて...**

計画当初、職務経験の浅い私たちにとっては海外の図書館を訪問することなど夢のような話

に思われました。また、訪問先担当者の方との実際のやりとりは、できるだけ日常業務の身近な側面を切り口とし実務に即した形で行うよう心がけましたが、これが予想以上に困難で、コミュニケーション力の不足を感じました。ですが、訪問先図書館の方々の親切さに助けられながら海外の図書館の現状に触れることができ、刺激的で有意義な旅であったと思います。最後になりましたが、伊藤館長はじめ、お世話になった皆さまにお礼申し上げます。

(注1) <http://juc.lib.cam.ac.uk/>

(おおしお・かずひこ 情報サービス課閲覧掛)  
(まの・ひろかず 農学部図書掛)

~~~~~

## アメリカ東海岸の大学図書館訪問報告 利用者サービスの向上をめざして

栗野容子

2003年11月30日夕暮れ。ニューヨーク州、ジョン・F・ケネディ空港。アメリカ東海岸の大学図書館を訪問する私の海外出張の始まりだった。出張期間は7日間。訪問先は東海岸に位置する3つの大学の図書館だった。総合大学のラトガース大学。工学専門のマサチューセッツ工科大学。歴史を誇るハーバード大学。それぞれの大学図書館を訪問し、先進的な電子図書館の利用者サービスについて、サブジェクトライブラリアンから情報を入手するのが主な目的だった。

最初に訪問したのは学生数約5万人の総合大学でニュージャージー州立のラトガース大学 (Rutgers University)。ここでは、科学と薬学の図書館 (Library of Science and Medicine) でサブジェクトライブラリアンについての話を伺った。図書館はライブラリアン (Librarian) という資格を持った職員と資格を持たない職員で構成されており、ライブラリアンの資格はアメリカでは図書館学修士 Master of Library Science (MLS) を持っていることが条件だった。特に分野を特定されて配置されているサブジェクト

ライブラリアンとしての仕事は、その分野のより専門的なレファレンス、選書、教官との情報交換が主な仕事であった。キャンパスがとても広いラトガース大学のレファレンスサービスはEメールでの参考質問が非常に多いとのこと、これはAsk-a-Librarianと呼ばれ、図書館 Web Site から簡単に質問を行うことができ、回答は48時間以内に送られる。またリアルタイムで参考質問のやりとりをするAsk-a-Librarian-LIVEというシステムもサービスしていた。

施設面では、図書館の利用方法等を教えるための部屋があり、メインのコンピューターから指示してレクチャーするシステムを活用して情報リテラシー教育をすることだった。

次に訪れたのはボストンにあるマサチューセッツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology) の科学図書館 (Science Library)。近代的な建物群がとても美しいキャンパスでビルの一部を占めていたのが科学図書館だった。改修が行われた出入口のカウンターコーナーはとてもデザインが洗練されており (写真1) その前には 24 hour study room があつた。ここ



写真1 科学図書館 (MIT)



写真2 サイエンスセンタービル (Harvard Univ.)

では利用者が24時間好きな時に学習することができた。コピー機と学習用の机、椅子が配置されており、グループルーム2室を含む広さで定員30名。図書館の片隅にあり周囲がガラス張りです外から中が見えるようになっていた。この部屋の利用についてその日の午後、インタビューした学生に尋ねた。学生寮での勉強ができない時に利用するそうで、深夜はキャンパス内の警備が行われており、学生寮への送迎のサービスもあるとのことキャンパス内の安全に配慮がされていた。

最後に訪問したのはハーバード大学 (Harvard University) のカボット科学図書館 (Cabot Science Library)。マサチューセッツ工科大学と同じボストンにありながら、そのキャンパスの建物群は対照的で歴史を感じさせ、静かなたたずまいをみせていた。そんな中でカボット科学図書館が入っているサイエンスセンタービル (写真2) は現代的な建物だった。その中には教室以外に、1階エントランスのフロアスペースに電話機のようにEメール用のコンピューターが数台設置され、飲み物や食べ物のショップもあった。ビル全体が開放的な雰囲気ですその一角に図書館があり、1階から3階の一部を占めていた。職員の働く場所は個室又はパーティションで仕切られたブースの中で、個人のエリアをそれぞれが持っており、事務室に多くのデスクが並ぶ日本とは文化的背景の違いを強く感じた。図書館内にある製本や修理の作業工房では貴重本の修理等を行い、和紙も多く使用されていた。和紙は白からベージュ、茶がかかったものというように種類が多く、たいへん質がいいものだと言われたのを聞いてうれしくなった。

蔵書数の増加に対しては郊外に図書を保存するところstorageを持っていて、利用者の貸出希望に応じて図書が搬送され、何回か借り出された本は規定により図書館に戻されるシステムだった。

この図書館では利用者に積極的に働きかける利用者サービスがあった。大学内の食堂施設等に出向き、コンピューターやプリンター等の機器を配置して仮設の図書館利用サービスコーナーを設け、図書館利用ガイドやレファレンスサービス等のサービスを行っているとのことだった。図書館を身近に利用できる効果的なサービスになっていた。

#### まとめ：

訪問した各図書館はWeb Site でのレファレンスサービスが充実しており、訪問前の情報入手がかなりできた。インターネット上での情報公開と利用者へのサービスの必要性の理解を深めた。

この文章を書くにあたり、訪問先でのライブラリアンの方々には本当に多くの情報を心良く頂いたことを改めて確認した。忘れることができない体験と共に深く感謝をしたい。

海外に図書系職員を単独で派遣するという企画は私にとっては大冒険だったが、たいへん有意義で貴重な経験となった。次回は行ってみたいという声も報告会の後に聞かれた。このような企画がさらに発展して続くことを願っている。

幸運にも外国出張に行かせて頂き、関係したすべての方々に感謝の意を表したい。

(あわの・ようこ 前多元数理研究科図書室、  
現愛知教育大学附属図書館)

## 平成15年度特別図書（人文・社会科学系）一覧

- 1 . Women's Language and Experience, 1500-1940 : Women's Diaries and Related Sources. Part 5 .  
（女性の言語と経験）マイクロフィルム 20リール  
英国の各機関に所蔵する女性史関係資料の集成。パート 1-4 は昨年までの特別図書で購入済み。  
パート 5 はEssex Record Office の資料から。
- 2 . 国立国会図書館所蔵明治期刊行図書マイクロ版集成  
「教育」部門「学校史・学校案内」分野 第 1 - 27 マイクロフィルム（27リール）  
国立国会図書館が所蔵する明治期刊行の教育図書群のうち「学校史・学校案内」分野の図書のマイクロ版。平成 7 年度からの継続購入。
- 3 . 向山誠齋雑記 天保・弘化篇 第 1 - 13 巻（全13冊）影印本  
江戸幕府の勘定方役人向山誠齋が幕府の行財政・外交等に関する文書・記録・先例等を筆録したもの。天保・弘化篇は天保改革期の立法史料や対外関係の貴重な史料を多く含む。
- 4 . 中外商業新報 第 1 - 12 巻（全12冊）リプリント  
『日本経済新聞』の前身でかつ昨年度までの特別図書で購入した『中外物価新報』の継続紙。経済ジャーナリズムの基礎を築いた新聞の復刻版。明治期日本の経済状況が克明に判明する基礎的かつ貴重な資料。
- 5 . Japan and America, c. 1930-1955 : The Pacific War and the occupation of Japan.  
Series 1, Part 2 : Subject files on Japan and diaries. マイクロフィルム（20リール）  
太平洋戦争勃発から日本占領期の日米関係史のなかで、第 2 次大戦及び日本占領期におけるアイケルバーガー将軍の日記、書簡、軍務関係書類等のマイクロ資料。マッカーサーに次ぐ有力者といわれた彼の資料分析の意義は大きい。
- 6 . Foreign Nations : the special studies series : Middle East, 1998-2002. Supple.  
（世界各国情勢；米国の主要シンクタンクによる各国外交・国内事情特別報告集：中東・アラブ編）マイクロフィルム（14リール）  
中東・アラブ地域の国際関係、政治変動、軍事バランス等の広範なテーマを網羅する最新データ及びデータ分析を所収し、研究論文集でもある。
- 7 . Collection of the Books on Body and Sexualities.  
（身体論関連文献コレクション）17冊、リプリント  
ジェンダー論研究に必要な諸文献をThe Body, Performance, Sexualities, Sexual Outcasts の 4 分野でまとめたもの。
- 8 . Linnaeus, C. / Houttuyn, M.: Natuurlyke historie, of, uitvoerige beschryving der dieren, planten en mineraalen. Deel 2, Stuk 1-14. Deel 3, Stuk 1-5.  
（ハウトゥイン：自然誌、またはリンネ氏の体系による動物・植物・鉱物の詳細記述）19冊（全37巻中）オリジナル  
ハウトゥインによるリンネの『自然の体系』の蘭訳本。分類体系や学名はリンネによるが他は訳者自身の膨大な研究成果をまとめたもの。飯沼慾齋や伊藤圭介の関係においても貴重なオリジナル資料。



## 法人化に伴う附属図書館利用規程等の改正のお知らせ

本年4月1日から、「名古屋大学」は法人化して「国立大学法人名古屋大学」となりました。

これに伴い、附属図書館の利用規程等の内容が一部改正されましたので、お知らせします。

今回の改正の主な趣旨は、法人化に伴い改めて独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律施行令第1条第1項第5号により、独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律第2条第2項第2号の政令で定める施設（所謂「歴史的資料等の保有機関・施設」をいう。）として総務大臣の指定を受けるためです。

詳細な内容については、本年4月以降閲覧室備え付けの「名古屋大学附属図書館利用規程」及び「名古屋大学附属図書館中央図書館利用細則」をご覧ください。また、庶務掛（内線3667）または閲覧掛（内線3675）にご確認ください。

### 主な改正点について

1. 図書館の利用資格に「一般の者」を明記したこと
2. 一般の者の閲覧利用に当たっての手続きを簡素化し、利用証の交付、取扱い及び貸出しに関する規定を整備したこと
3. 図書館資料の目録と図書館利用規程等を閲覧室に備え付ける規定を設けたこと
4. 独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律施行令第2条第1項第3号に準じ、図書館資料の個人情報等記載部分の閲覧を制限する規定を設けたこと
5. 閲覧室の著しい混雑時に利用制限できる規定を設けたこと
6. 新年度からの学年暦の変更に対して開館時間、休館日等所要の改正を行ったこと

### ●●●●●●●●●●●●●●●● [国内図書館関係日誌] ●●●●●●●●●●●●●●●●

16. 1. 9 国立大学図書館協議会法人格取得問題に関する附属図書館懇談会（第7回）（於：東京大学）  
出席者：伊藤館長、内藤事務部長、北村情報管理課長
16. 1.14 東海地区公共図書館・大学図書館館長懇談会（於：名古屋大学）  
出席者：伊藤館長、逸村研究開発室助教授、内藤事務部長、北村情報管理課長
16. 1.22 平成15年度国立大学附属図書館事務部長会議（於：富山大学）  
出席者：内藤事務部長
16. 1.23 国立大学図書館協議会第4回課題解決プロジェクトチーム会議（於：東京大学）  
出席者：北村情報管理課長
16. 1.28 第7回電子ジャーナル・タスクフォース（於：東京大学）  
出席者：伊藤館長、郡司情報システム課長
16. 2.13 NACSIS-CAT/ILL講習会担当者会議（於：国立情報学研究所）  
出席者：蒲生情報システム課図書館専門員
16. 2.19 東海地区図書館協議会（仮称）連携・協力検討部会（第16-1回）（於：名古屋大学）  
出席者：伊藤館長、逸村研究開発室助教授、北村情報管理課長、白井情報サービス課長、伊藤情報管理課課長補佐、川添情報サービス課参考調査掛長



- ・第10回学術情報開発専門委員会<3.22>
- ・図書館システム仕様策定委員会<3.22>
- ・第15-11回学術情報事務会議<3.24>
- ・医系・理系図書室連絡会<3.24>
- ・和漢古典籍整理専門委員会（第15-3回）<3.26>

#### 行事

- ・第1回外国出張者の帰国報告会（於：附属図書館）<1.15> 参加者：37名
- ・第2回外国出張者の帰国報告会（於：附属図書館）<1.23> 参加者：36名
- ・第6回附属図書館研究開発室懇談会 - 言語処理技術が拓く学術情報流通基盤 - （於：附属図書館）<1.26>
- ・ILL学内連絡会（於：附属図書館）<2.13>
- ・第7回附属図書館研究開発室懇談会 - 診療情報（カルテ）の開示をめぐる様々の問題について - （於：附属図書館）<2.27>
- ・2004年春季名古屋大学附属図書館特別展内覧会（於：附属図書館）<3.22>
- ・2004年春季名古屋大学附属図書館特別展 - 和歌（うた）の書物：新古今和歌集とその周辺 - （於：附属図書館）<3.23 ~ 4.21>
- ・平成15年度第2回名古屋大学附属図書館長と全学図書系職員との懇談会（於：附属図書館）<3.25> 参加者：70名

#### 研修会・講習会等への参加

- ・平成15年度愛知図書館協会レファレンスサービス研修（於：愛知県図書館）<1.9> 参加者：大嶋寛子（中）、橋本紀子（中）
- ・学術ポータル担当者研修（於：国立情報学研究所）<1.13> 参加者：山本哲也（情連）
- ・平成15年度学術情報リテラシー教育担当者研修（於：学術総合センター）<1.19 ~ 1.21> 参加者：川添真澄（中）、栗野容子（多元）
- ・東海地区大学図書館協議会研修会（平成15年度第2回）（於：椙山女学園大学）<2.19> 参加者：伊藤館長、伊藤哲谷（中）、他9名
- ・平成15年度愛知図書館協会資料保存研修（於：愛知県図書館）<2.20> 参加者：飛田美穂（中）、原系子（中）、花田明美（医）

- ・名古屋大学電子図書館国際ワークショップ（於：名古屋大学）<3.8> 参加者：53名
- ・平成15年度愛知図書館協会IT研修（於：愛知淑徳大学）<3.11-12,16> 参加者：栗野容子（多元）

#### 人物往来

<ご多幸をお祈りします> - 退職された人 -

- ・島岡眞（情報管理課資料管理掛長）3.31
  - ・入山美智子（情報サービス課閲覧掛長）3.31
  - ・石黒直子（情報システム課図書情報掛）3.31
- <ご健闘を期待します> - 他機関等へ昇任・転任になった人 -
- ・内藤英雄（東北大学附属図書館事務部長）4.1（附属図書館事務部長から）
  - ・栗野容子（愛知教育大学附属図書館参考係長）4.1（理学部・理学研究科・多元数理科学研究科図書掛から）
  - ・棚橋是之（豊田工業高等専門学校庶務課図書係長）4.1（国際開発研究科情報資料室から）

<はじめまして> - 他機関から転任した人 -

- ・山下洋一（附属図書館事務部長）4.1（金沢大学附属図書館事務部長から）
- ・山本利幸（情報管理課資料管理掛長）4.1（岡崎国立共同研究機構庶務課情報整理係長から）
- ・畠山輝敏（教育学部・教育発達科学研究科図書掛長）4.1（核融合科学研究所庶務課図書係長から）

<はじめまして> - 新しく採用になった人 -

- ・山口典子（情報システム課図書情報掛）4.1
- ・平田沙矢香（法学部・法学研究科図書掛）4.1
- ・松下律子（医学部分館情報サービス掛）4.1
- ・岡田佳子（情報管理課会計掛）4.1
- ・中田有紀（情報管理課資料管理掛）4.1
- ・奥村文子、三輪美保子、天野望、小川七衣、小松由弥（以上、情報サービス課閲覧掛）4.1
- ・石坂裕子、小倉奈津子、大和祐子（以上、情報サービス課相互利用掛）4.1
- ・柴田恵（情報システム課雑誌掛）4.1
- ・市川智子、徳元まいね、中島孝司、野村砂緒里、橋本美早子、水野牧子、三角享子、森かをる（以上、情報システム課図書情報掛）4.1
- ・辻公子、長屋隆幸、若松克尚（以上、研究開発室）4.1

- ・篠田拓 (医学部分館情報管理掛) 4.1
- ・江口啓子、岡本美奈、小澤あゆみ、小嶺真耶、櫻井瑠衣、藤田亮 (以上、医学部分館情報サービス掛) 4.1
- ・橋本真弓、蜂矢健介 (以上、医学部分館保健学情報掛) 4.1
- ・小林忠資、小林文生、島義弘、下木戸隆、李振潔 (以上、教育学部・教育発達科学研究科図書掛) 4.1
- ・田中春奈、松本麻人 (以上、教育学部・教育発達科学研究科附属学校事務掛) 4.1
- ・尾崎水帆子、武田恭子 (以上、情報文化学部・情報科学研究科図書掛) 4.1
- ・酒井真由 (理学部・理学研究科・多元数理科学研究科化学図書室) 4.1
- ・岩間知美 (理学部・理学研究科・多元数理科学研究科生命理学図書室) 4.1
- ・大島明子、近藤千恵、立花知加子 (以上、理学部・理学研究科・多元数理科学研究科多元数理科学図書室) 4.1
- ・笈麻紀 (工学部・工学研究科図書掛) 4.1
- ・尾崎啓子、加藤ゆかり、須賀理会、武田智子、鶴見美奈、盛田暁 (以上、農学部・生命農学研究科図書掛) 4.1
- ・許琳玲、Rolando Requena Minami、孟科 (以上、国際開発研究科情報資料室) 4.1
- ・小出昌子 (地球水循環研究センター図書室) 4.1
- ・井上久子 (総合保健体育科学センター図書室) 4.1
- <これからもよろしく> - 配置換になった人 -
- ・高橋知恵子 (情報サービス課閲覧掛長) 4.1 (工学部・工学研究科図書掛長から)
- ・堀木和子 (情報システム課雑誌掛長) 4.1 (教育学部・教育発達科学研究科図書掛長から)
- ・岡本正貴 (医学部分館情報サービス掛長) 4.1 (情報連携基盤センター学術電子情報掛長から)
- ・澄川千賀子 (工学部・工学研究科図書掛長) 4.1 (情報システム課雑誌掛長から)
- ・石田康博 (情報連携基盤センター学術電子情報掛長) 4.1 (医学部分館情報サービス掛長から)

- ・峯岸ななえ (経済学部・経済学研究科図書掛) 4.1 (情報システム課図書情報掛から)
- ・菊池有里子 (理学部・理学研究科・多元数理科学研究科図書掛) 4.1 (経済学部・経済学研究科図書掛から)
- ・森由香 (農学部・生命農学研究科図書掛) 4.1 (法学部・法学研究科図書掛から)
- ・夏目弥生子 (国際開発研究科情報資料室) 4.1 (農学部・生命農学研究科図書掛から)

#### 規程等の改正

- ・名古屋大学附属図書館規程 (16.4.1新規制定)
- ・名古屋大学附属図書館研究開発室規程 (16.4.1新規制定)
- ・名古屋大学附属図書館商議員会規程 (16.4.1新規制定)
- ・名古屋大学附属図書館利用規程 (16.4.1新規制定)
- ・名古屋大学附属図書館中央図書館利用細則 (16.4.1新規制定)
- ・名古屋大学附属図書館文献複写規程 (16.4.1新規制定)

#### 部局動向

- ・医分館：CINAHL on Ovid Onlineサービス開始 (於：鶴舞・大幸キャンパス) <1.15~>
- ・医分館：BDS (ブックディテクションシステム) の導入 (於：保健学情報資料室) <4.1~>
- ・工学部電気・情報図書室：IB電子情報館に移転・開室 <4.1~>
- ・国際開発情報資料室：世界銀行情報コーナー開設 <4.1~>

#### 編集委員会

白井克巳 (委員長) 山本利幸 (中) 中村香世 (中) 三好千里 (中) 金田志保 (教育) 澤口由好 (法) 安井裕美子 (医) 川窪知子 (医)